

焦らし

睾丸責め

快楽



とある娼館の一夜
～肉体の手懐け～

乳首責め

羞恥

お尻

宵闇の案内

焦らし	5
乳首	10
睾丸	製品版
最後の……	製品版
エピローグ	製品版

登場人物

娼婦 リィネ

街最大の高級娼館を営む謎のオーナー娼婦。
銀髪、美白の妖艶な美女。

大男

娼館に訪れた、国家最強になった男。
金と女には人並以上に欲深い、恵まれた
肉体と天性の武才で念願のチャンピオン
に輝いた。

とある娼館の一夜　　（肉体の手懐け）

式　フロン

熱気あふれる巨大な格闘場。

四方八方観客で埋め尽くされていたその中央で一人の大男が拳を天高く突き上げた。

瞬間、客席から地鳴りのような歓声がわき上がり、人々の興奮はこの日最大のボルテージをむかえた。

頂点を極める格闘大会、その勝者が確定したのだ。

倒れ込む敗者の傍、堂々たる勝者の姿。

筋骨隆々、鋼のような肉体をしたその男はもう片方の腕も天へと突き上げると上空にむかって雄たけびをあげた。

数年ぶりに開かれた大会で^{チャンピオン}国家最強の男が誕生した。

だが天を仰いでいる頂点に立った男の顔は、やりきった晴れやかなものではない。

求める餌を目前にした獣のようなギラついた目をしていた。

それというのも勝者に与えられるモノにその理由はあった。

栄誉名声、そして――

男が、いや誰もが一番に求めるもの富、そう金だ。

まもなくそれが手に入る。

口々に称える大きな歓声の中、宰相と呼ばれる国王の側近が輝く器にのつた褒章を持って彼に近づく。

そして通り一遍倒のねぎらいと功績を称える言葉を口にして、大男に賞金

を差し出した。

男は欲望丸出しの目ですくい上げるように器から賞金を受け取った。

王国金貨三枚。

たった一枚で王都に家が建てられて十年は生きていけると言われている。

巨大な肉体を持った男が一番欲していたもの、それがこの金貨だった。

男はこれを得るために幾度の苦難を乗り越えてきた。

全身にみられるアザや顔に残った傷跡がそれを物語っている。

半生を懸けて手に入れたその光沢を大きな手でにぎりしめると再び巨漢は拳を天へと突き上げた。

見事な肉体。

まるで彫刻のように格闘場の中央でそのシルエットが浮かび観客は歓声をあげる。

彼の心中を知る由もない観客たちは、その堂々たるたたずまいに新たなる英雄の誕生を期待したのだった……。

それから数刻の後――

ハアハアハア……、

熱気が渦巻いていた格闘大会の熱も冷め街が寝静まった深夜。

同じ街にあるとある娼館で、堂々たるたたずまいをしていた英雄の卵は四つん這いの姿で息をあらげていた。

「ココ……それにココ、それともコッチ？ ふふっどこがイイのかしら？」

低い艶やかな音色が室内に響き渡る。

高価なランタンがとび色の光をともし薄暗い部屋。

そのベッドの中央に二つの影が浮かんでいる。

まるで巨大な牡牛のような男と、手足がながく曲線を描いたしなやかなカラダつきをした女。

くっつかず離れず……、絶妙な近さで二人の男女が甘事にふけていた。

「ずいぶんとピンカンね……、いやらしいわ」

「おううっ」

いや、正確には甘事にふけているのは巨漢だけである。

汗を流して肉体を緊張させている彼とは対照的に女は真っ白い肌で冷たい表情をたたえていた。

絢けんらん爛らんきらびやかとまではいかないが、豪華な調度品が整った大部屋。

その中央には王族が使うような天蓋のベッドがあり、そばには黒檀の机が置かれている。

その上には男が命を懸けて手に入れた三枚の金貨が並べられていた。

ここで今、淫らな遊戯が行われようとしていた――。

ここは街で最大の娼館の一室。

女好きなら生涯に一度は訪れたいと熱望する高級娼館。

その中でも王族や貴族のみが通されるという特別な部屋。

そこに金貨をたずさえて、国最強となった男がいた。

噂に名高い最高級の娼婦を抱くために……。

当初、意気揚々王国金貨を手乗りこみ、これみよがしに金を見せつけた

男に娼館の受付はすげない対応をとった。

“お帰りください”

“お金ではその女性は買うことができません”

栄誉ある大会で優勝した男がそんな言葉に納得できるはずがない。

引き下がるつもりのない男がしばらく乱暴な問答を繰り返していると、騒ぎを聞きつけて件の張本人、最高級娼婦が顔をみせた。

男にとってそれはまさに願ったり叶ったりの展開だった。

“オイ、ねえさん、俺の相手をしろ抱いてやる！”

そう言い放った最強の男^{チャンピオン}に彼女は不敵な笑みを見せて言ったのだ。

“いいわよ、ただし私の遊^{サービス}びを受けた後になら……ね”

こうして男は部屋に通されるとまずは娼婦のサービスを受けることになったのだ。

相手をするのはこの高級娼館のオーナーであり、最高級嬢と名高いリイネという女だった。

流麗な銀髪に片目が覆われる髪型をした絶世の美女。

深緑の瞳とくつきりとした目鼻。

肌に浮き上がる桃色の唇が現とは思えないくらい妖艶な貌を映えさせている。

真っ白い肌にまとった黒いシースルーのドレス姿は匂いたつ色香をふりまいていた。

人並み以上に女好きで様々な商売女や王族、貴族令嬢をみてきた大男でも彼女のような女は初めてだった。

そうまさに“妖艶”

彼女を目の当たりにして男は早々に納得した、最高級娼婦という称号が大げさではないという事を。

——だが、手に入れた金貨でその日のうちに最高級嬢を意気揚々と抱こうと訪れた彼は、未だに望みを果たせないうた……。

「うおっおおうっ、い、いいっ」

どれくらい時間がたったか、たくましい肉体の男はしなやかな指でこすられ、くすぐられ何度も何度も教え込まれるように甘い愛撫をされて、次第に受け入れるようになっていた。

娼婦はすぐれた話術と巧みな愛撫で一枚一枚衣服を脱がしていき丸裸にすると、そこからは飽きさせないように全身にわたってタッチくすぐりで、男を一定の興奮状態にもっていかせていた。

弱そうな部分をあぶり出し、自然と自分が優位になるように誘導、指先で肉体を操っていく。

男をこの状態にまでもっていくのに数時間、しかし彼女にとってはこれはまだ準備段階にすぎなかった。

全裸で四つん這い、明らかに快楽を享受するだけになった受け身な男の姿に娼婦は口角を持ち上げた。

(そろそろはじめるか)

娼婦リィネはこれまでの指技で焦れるような愛撫を与えて言葉巧みに、彼の手持ちである王国金貨を「見せ金」として三枚机の上に並べさせていた。

ランタンのとび色が鈍く反射する黒檀の上に自ら発色するかのごとく、まばゆく三枚の金貨。

横にはリィネが飲み干したワイングラスが置いてある。

そばのベッドで娼婦は、四つん這いの大男に添うように横すわりになり白い手を肉体へと伸ばしていく。

「今日はどれくらい私に払ってくれるのかしら？」

そういいながら先ほどから何度もくすぐり、あらい息を上げさせている男

の弱い脇の下あたりを指で撫でまわす。

「ふふっ金貨一枚？」

「なっっ、ふざけっんんっるなっ」

甘い愛撫に息を乱されながらも彼女の言葉に巨漢は声をあらげて叫んだ。
ありえない要求に男に理性が戻ってくる。

それもそのはず家が建てるほどの大金を何が悲しくてたった一人の女に、
一夜でつぎ込まなければならぬのか……。

「高すぎる、あんたがイイ女というのは認めるが——、っっっんぐ、ハアハ
アだが……その値段にはつりあわねえ、っんぐうっ」

正直な意思を伝えようとするが、言葉の所々でくすぐりを入れられて声を
乱される。

「せめて百分のいっ——っつああおう」

「そう？ ふふっ、ならこのままずっともだえてなさい」

つぶやいたリィネは指先を動かすと首筋、脇腹そして恥骨や下腹部あたり
を両手で滑らかかつ素早く動かしていった。

「金貨一枚も払えないならこの程度で十分よ……」

「おっ、おうっや、やめっ——おっおっおふっ」

男の野太い声上がる、決して本気では否定しきれない喘ぎのまじった声。
そんな彼を完全に無視して娼婦はその後も容赦なく時間を与えずに指先の
愛撫を続けていった。

——性感帯以外を。

「おおっっハアハアっっおおう、おっぐはっあああっ」

(なかなか粘るわねさすが最強の男チャンピオンといった所か、……でも)

息も絶え絶えといった様子の大男を両指で翻弄しながら、リイネは彼の肉体そして表情の変化をつぶさに観察していた。

しばらくは愛撫に耐えようと筋肉をこわばらせていた男の肉体だったが、性感帯ポイントをはずした指先の愛撫に焦れた肉体は無意識に指を追いかけるような挙動をしはじめていた。

(そろそろね……)

「言っておくけど私にとっては金貨一枚なんて普通の報酬よ」

「あつううぐ、な、なに？」

口から液体を垂らさんばかりに大きくあけて男が聞きかえす。

「商富豪や貴族様は一夜でモット払ってくれるわ……、ただし——」

「おぐっ、うっうう」

「それなりの甘い対価をねつとりと与えてあげているケド……」

まるで唾液が直接鼓膜に擦り付けられるような湿った低い声。

それは男の本能に直接響き、彼女のささやきが真実だと感じさせた。

本物の金持ちなら、いくら払ってでもこの先の快樂を欲してしまうだろうと……。

自分にとっては金貨は魂をすり減らしてようやく得た大金、だが彼女にとってはおそらくそうではない。

それが男のプライドを揺らした。

「そ、それがっ、なんっ」

「それが私の価値なの」

娼婦は指先で男の顎をなぞり言い切った。

思わず目を合わせられずおそれてしまった男の態度にリイネは内心で笑みを浮かべた。

(ふふっ見てなさいそのちっばけなプライドすぐに蕩けさせてあげる)

「アナタにも同じコトしてあげるわよ？」

「な、なにっ」

ささやきながらリィネは首元をくすぐった指先を大きな胸板の中央へとな
でおろしていく。

そして、浅黒い乳輪をこね回すように軽く渦をまいて愛撫した。

これまでの肉体へのくすぐりでその先っぽはツンツと尖っていた。

そして逆の手はソロソロと垂れ落ちて膨らんでいる巨大なイチモツの根本
へと這っていく。

ベッドに横座りの娼婦の両腕が四つん這いの肉体、上下に伸びる。

上半身と下半身、それぞれ両手が乳首のまわりと皮袋に到達する。

今までで一番性感帯に近い場所に細い指先がふれると――。

「金貨……、一枚目でまずはココ」

ささやきと一緒に爪先が胸の尖った先端をカリッと素早くひっかいた。

「ちくび、してあげる……」

「おおっっ」

顎をはねあげた大きな男の耳に唇が寄せられる。

「二枚目がココ」

もう片方の手の先が指でつまむようにあまった陰囊の皮をキュッとはさみ
こんだ。

「オスのふくろ……」

そのまま煽り立てるように細かくブルブルと揺らしていく。

唇が耳元で湿った音を鳴らして低い声を響かせる。

「おうっううっ」

「そして三枚目がコッチ……」

ゆっくりと睾丸を揺らしていた指が離されるとそのさらに奥、谷間へとた
どり着く。

ゾワリ——、
熊手のように指をまとめて爪を立てた白い手がお尻のワレメそして、すぼまりと陰囊の間をひっかいた。

ゾワゾワっと

巨大な男の背筋が伸びる、無視できないアヤシイ感覚が全身をふるわせた。

あえてその場所を口にせずに——

「払ってくれたらタップリとサービスしてあげるわよ」

耳元でささやき、最後に両手の指先が這いあがり、再び尖った乳首の先端を爪先でカリっと小さく引っかいた。

「おうっ」

「さあ、どうする？ このまま朝まで我慢しつづけるのかしら？」

「う、うぐぐっ」

四つん這いになった男からうめき声もれる。

つづげざまに三か所の性感を煽られて欲望に火がともる。

額には一筋の汗。

そして——

「い、一枚だっ、一枚で受けてやる」

しばらくの葛藤の末、彼は快楽に耐えきれず金貨一枚を払うと宣言した。

「ふふっ、わかったわ」

(まず一枚目……)

思い通り、リィネはゆっくりと唇を舐めた。

じわりじわりと追い詰めるように焦らしてやり、少しだけ先の期待を感じさせてやる。

求める快楽の少し上をいくような妖しさに牡は絶対に抗えないことを経験から彼女は熟知していた。

男の心理は手に取るようにわかる。

どうせ金貨は、あと二枚もあるだから一枚くらい払ってやってもいいと考
えているのだろう。

「じゃあこれは、私がもらうわね」

四つん這いの男を指先で軽くからかうと、身を乗り出してリィネは机に載
る金貨を一枚つまむ。

そのまま横にある飲み干した空のワイングラスに――

「ああっ」

チリーンと落とした。

名残惜し気な男の表情を見つめながら……。

(いい表情、この男期待できるわね……)

矜持をかみ殺すような苦い顔をみせる男にリィネの加虐心が煽られていく。
この男は残り二枚も残っているとわかっているにもかかわらず、誘惑に抗えなかつたと
いう認識をぬぐえずにいるのだ。

武力ですべてを押し通してきたオスはこの手のプライドを常に持っている。
自分は強い、我慢強く誰かに言いなりになるような男ではないのだ……

今からそれを覆してやる――

リィネにとってはそれこそが金貨を得るよりよっぽど愉しいコトだった。
オスの堕ちる過程を見るのが何よりも満たされる……。

「じゃあ、報酬も頂いたことだし、しっかり悦ばせてあげる」

娼婦は弾んだ声で宣言すると、しなやかな肉体をすべらせて、這いつくば
るように四肢をついた巨体の下へともぐりこんだ。

ベッドの上で仰向けになり大男とむかいあう体勢になる。

彼の目を見つめてクスリと笑いかけると、両胸に手を伸ばして指先を大き
な胸板の中央付近に這わせていく。

先っぽの尖った乳首。

「いっぱいココを可愛がって、」

細い両手の人差し指、その爪先が素早く上下に動き出した。

「――あげる」

「おっ、おごっおおおおっ」

カリカリカリカリカリッ、っと連続して引っ掻くように爪は先端のみを容赦なくはじいていく。

これまで胸以外をさんざん愛撫して焦らした分、突っ張った先っぽは集中して敏感になっていた。

男は先っぽだけをイジめる爪先のテクニックに思わず顎を持ち上げてしまう。

ガクガクと無骨な肉体を揺らして四肢を踏ん張り顔をのけぞらせた彼を、真下からじっくりと観察しながら娼婦は指先だけを丹念に動かし続けていた。

指先でくすぐられるたびに乳首からジンジンジンと積もっていくようなシビレが蓄積されていく。

あふれんばかりのその感覚は次第に胸から下、お腹さらにはその先へとシビレを伝播させていった。

娼婦はそんな容赦のない指技をひと時も止めずに続けていくと――

「あらっ、ふふっ何か垂れてきたわよ、……お腹に」

嘲笑うような彼女の言葉通り、小刻みにふるえる男の下半身からタラリッと透明な液体が娼婦の身体へと垂れていた。

「おっ、おっおうううっ」

「透明なお汁、ガマン汁……お腹についたわ、ふふっはずかしい」

下から細い目で巨大な男のソレをじっくりと見つめる。

肉体への焦らし、乳首への責めをへて男の肉棒は大きく膨れ上がり先端か

ら歓びの先走りを流していた。

指先で素早く乳首をこすりながら、ゆったりとした口調で男の羞恥を刺激する。

「ぷっくりと膨れた亀頭の先っぽからどンドン垂れてくるわよ、おもしろい元が……」

口をあけて顔をそらしている男の耳がそのささやきにジンワリと朱色を帯びていく。

「男が乳首で濡らすなんて……、聞いたことないわね」

「おっ、そっそんなこっつとおおっ」

カリカリカリカリッとイジメられながら言葉でも脳内を羞恥で染め上げられる。

男にとって感じたことのない異様な感覚に肉体がゆでるように熱が宿っていった。

「どう？ 金貨一枚の味は……、とっても気持ちがいいでしょ？」

「おほっ、そっそれはっそうだがあっおおっ」

熱い感覚に流される。

二本の指先が奏でる官能の魔技が上半身を狂わせていく。

「おっ、そっそれっは、そこばっかりはっ、やめっ——」

「ここばかりを、たっぷりカリカリコリコリいつまでもしてあげるわ」

どうしようもない焦れを感じながらも、その言葉に本能的な危機を感じて男はガクガクと肉体をふるわせると——

「もっ、や、やめっおおっ」

唾をとばして叫びながら、魔指から逃げ出すように肉体を上大きくらせようと背筋を伸ばそうとした。

だが——

「うぎっひっ」

「……動かない」

脳を心から凍らすような声と同時に、ギュッと乳首の先っぽがしなやかな指先でつねられる。

「いいひっ、やめっ」

「逃げないの、イタいのはまだ教えてないでしょ？」

ギリギリとねじるように乳首の先っぽが引っ張られる。

「あっあがっ」

口端から小泡を吹かせる男に、躡けるようにリィネは顔を近づけてささやく。

「ガマンしなさい、キモチいいことしたいでしょ……」

低い声と鋭い眼光。

真下から見上げられて睨まれた男はその美しさと迫力にかたまる。

ゾクリと背筋をふるわせる感じたことのない感覚。

数多の戦闘でも経験したことのない畏怖のような感情と乳首への痛みが混じり無意識に肉体の感覚を鈍らせる。

それはこれ以上は危険だという本能による逃避だった。

男の様子に娼婦は敏感に変化を感じ取った。

チラリと視線をさげて、彼の股間を流し見る。

すると下半身は痛みのためだろうか、かすかに硬度をなくして半勃ちになっていた。

興奮を沈めた男に向かってすぐさまリィネは指のつねりをやめると、慰めるようにクリクリと優しく乳首全体をくすぐってやる。

痛みでの躡けはまだ早いと判断した。

(この男、思ったより……)

「イタいのよりは、キモチいいほうが好きでしょ？」

「ああっうっ」

「ほら、こういう刺激もとっても心地いいはず……」

優しい声でささやくと口を乳首に近づけて舌をだして、

「ちゅばあっえれえろっっ」

滑らかな舌を口から出すと、男のピンピンに腫れあがる片方の乳首を舐めしゃぶった。

「あっ、いいっそれっいいっ」

歓喜の喘ぎと同時に再び下半身がムクムクと起き上がっていく。

それも先ほどよりもどこか勢いよく角度をあげて、ヒクヒクとふるえるとすぐさまトロリと液体を漏らし始めた。

(やっぱり、……敏感すぎる)

——他愛ない。

大男への認識をリィネは修正する

強靱な肉体と誰よりもタフな武闘派の精神を持っているが、官能の分野ではまったく逆のようだ。

女色においては痛みや快楽に徹底的に弱く、持ち合わせている精神へのつながりは脆弱といえた。

典型的なオス同士でしか力を証明できない生き物、与しやすい。

唇と舌で優しく乳首をころがしてやりながらリィネは、彼の本性をすでに理解しつつあった。

「れえろおおつれろおっ」

逃げる肉体を許さないとばかりの鋭い痛みを責めから、すぐさま甘い快楽を与える舌舐め。

「お、おおっ、ね、ねえさんっ、そ、そこばかりは——」
飴と鞭の緩急が男に刺さり、その効果は言葉づかいにも現れはじめていた。
リィネは内心でニンマリ笑いながら乳首から口を離す。

「たまらない？ ふふっ金貨一枚でいつまでもココでキモチよくなれるのよ、
いいでしょ？」

再び口で左右の乳首を交互になめしゃぶると、指の腹で乳輪をくすぐって
やる。

胸だけを徹底的に執拗に——、
クルクルつと指腹で円を描くように撫でて乳首を緩めてやり、カリカリと
爪先で搔いて先端を尖らせる。

そしてチュパチュパレロレロ唇で吸って舌で舐める。

上半身に快楽を積もらせ焦れを全身に伝播させて、無骨な肉体を感じやすい
敏感なカラダへと変えてやる

「おっおおっ、ああっ、ハアっおおおっ」
途絶えない喘ぎ声。

岩盤のような胸板の真ん中、その先っぽは男とは思えないほど真っ赤に染
まりツンと尖っていた。

——出来上がった性感帯。

巨体の下で楽器を奏できるように両手と口唇で肉体を弄びながら、リィネは
視線をゆっくりと下半身にうつした。

(もう、じゅうぶんね……)

ヒクヒク揺れる先っぽから水飴のような液体を垂らす牡の象徴。

そのぶっとく膨らんだイチモツの姿に、娼婦はイィ頃合いだと内心で舌な
めずりをした。

緩んだ乳輪を人差し指と中指のあいだで挟むと突起した先端を親指でこす
りながらささやきかける。

「どう乳首だけでも、とつてもイイでしょ？」
「うぐっ、いっ、それはっ——」

答えに詰まる大男の股間にスルリと真っ白い脚を滑り込ませる。

「あがつっ」

足の甲で陰囊をタップと揺らすようにたたいてやった。

「下^{こっち}もとっても悦んでるわ」

「あっあっ、そこっ」

乳首のみに神経を集中させていた男は、唐突な下半身への刺激に大口をあけて声をもらすと腰をビクリとはねあげた。

「おタマこんなにパンパンに膨らませて……」

甲で持ち上げるように牡袋をゆらすと、すぐさまタップ、トントンと心地のいいリズムで中のタマを器用にはずませる。

さんざん焦らしてきた上半身から股間へ、積もりに積もった欲望がながれはじめていった。

「ああっそっ、だっおっおっ、っいいっ」

「あら、勃起が……」

足のからかいに耐えきれないかのように、

「ペニス跳ねまわって、はちきれそう、ふふっ」

股間のソレが上下に大きく動いて透明な汁をダラダラと激しく垂れ流していた。

甘い煽りについて大男は耐えきれなくなり、下から伸びる白い脚に股間を押し付けようと腰をおろす。

「そこ、そこもっ、もっ」と

「あら？ ダメよ」

だがすぐに察知したリィネは押し付けてきた分だけ素早く脚を引いて躲す。

「ダメよ、……ココはおあずけ」

「んあっ、そ、そんっ、あうっ」

太ももの付け根、陰囊の根本を足のつま先でクリクリと抑えると、最低限の刺激しか与えない。

「金貨一枚分の乳首だけでたのしみなさい」

「それが対価よ……」

小さくささやきリイネは再び手をつかって男の胸板を撫でまわした。

ただその刺激は先ほどまでより緩い――、

手のひら全体で揉むような緩慢な動かし方。

男の乳首にまるで満足できない感覚が広がっていく。

「うっぐっ」

巧みな娼婦の手練手管。

溜まりに溜まった性感をリイネは足をつかって彼の意識を陰囊へと集中させていた。

もっとも敏感になっている性感帯を睾丸へとうつしたのだ。

そのため乳首の刺激はただただ薄い焦れが募るばかりで、快樂の本流は肉体をつたって牡袋へと流れ込んでいく。

「ああっ、だっ、た、たのむっそこだけじゃもうっ」

ついに男は耐えきれないように願望を口にした。

「ふふっ、そんなにこっちもしてほしいの？」

下からのぞき込むように薄く笑いながら娼婦の白い足のつま先が再び陰囊をつつついた。

「ほ、ほしい、たのむっ」

大の男が四つん這いのまま真下で笑う女にむかって首をふって懇願する。

「いいけど最初に言った通り、ココをしてほしいなら二枚目の金貨が必要なのよ？」

釘を刺すような悪魔のささやき。

「うぐっ」

その言葉に男の動きが止まる。

金貨と言う言葉が甘い官能に支配されている脳に冷や水をぶっかけた。

男は睾丸に感じる甘いうずきに耐えながら葛藤する。

“またも快樂に流されて大切な金貨を失ってしまった方がいいのか？”

自問自答の末、男の理^{プライド}性がかすかによみがえった。

「や、やはり胸、乳首だけで……うぐっ」

なんとかか今の刺激で耐えようと、口にした男に娼婦はすぐに反応した。

「あらそう？」

脚をわざとらしくベッドにパタンッと下ろして完全に股間から足を撤退させる。

「あっ」

名残惜し気に股間をみつめる男に向かって娼婦は片手のひらで彼の胸を押さえながら、じっと目を見つめてささやいた

「残念……」

そして、もう片方の手をソロリと陰囊へと伸ばした。

細い指先が膨れ上がった皮のふくろを摘みあげた。

「こっちのキモチよさは段違い——」

プルプルプルプルプル、摘まんだ指を限りなく小刻みに揺らして煮えたる辜^{よくぼう}丸を揺さぶっていく。

「な・の・に……」

甘く煽る絶妙な意地の悪い手つき。

「本当にいいの？」

念押しするように問いかけた質問、それと同時に皮袋を揺らしていた白い

指先が五本花咲くように広がっていった。

「そっ、それはっ——」

グチュン

抗おうと葛藤する思考を中断させる強烈な快楽が睾丸を襲った。
一瞬で男の理性が崩れ落ちた。

「おっ、おほっ、あっあうっ、に、二枚目、二枚目をっ」

皮を揺らしていた白い指先が五本、わしづかみにするように肉袋の中にもれていった。

「そう……、二枚目も愉しみたいの？」

四肢をふるわせる牡の下で、気品すら漂わせながら娼婦が問いかける。

「おっ、おほっ」

モニュモニュと大きく膨らんだ肉袋を器用にもみほぐしながら——

「お、おおっ、に、二枚、は、払う、はらうからった、たのむっ!!!」

涎を垂らさんばかりに大口をあけて懇願する大男。

その様子を冷静に見つめながらリィネは口をひらいた。

「……じゃ、頂くわ」

(……二枚目っ)

たくましい肉体をした国内最強の猛者。

そんなオスの頂点のような存在をリィネは乳首と睾丸だけで掌握していた。

——墮とすのはたやすい……。

たとえどんな屈強な男であろうと彼女の前では、ただの弱い牡でしかなかった。

以上がお試し版になります。

果たして彼は残った金貨を守りとおすことができるのか？

娼婦の快樂責めはまだまだ続きます。

気になる方は製品版にてお楽しみ下さいね。

ではでは～ by式 フロン